



大西脳神経外科病院だより 第33号

ぶれいん

発行日：平成29年10月吉日

発行人：学術図書委員会

大西脳神経外科病院

編集責任者：吉野 孝広

大西脳神経外科病院の理念

生命を尊厳し、科学の心と芸術的技術と人間愛をもって病める人々に奉仕する。

大西脳神経外科病院の基本方針

生命と人権を尊重した医療を実践する。

神経疾患の専門的・高度医療を実践する。

常に新しい医学の修得に励む。

救急医療は医療の原点と考え、24時間対応する。

地域の医療機関との連携を密にし、地域協力型の医療を志向する

真の脳卒中医療を目指して

大西脳神経外科病院 理事長・院長 大西 英之

先日ケントギルバート氏の書かれた本を読む機会がありました。その内容は中国と韓国、日本を比較してその民族性の違いを述べたものですが、言われている事は儒教の教えの理解の仕方が各国で違うと言うことです。儒教の中では家族を大切にするとか、身内親族を大切にすることは良いことであると示されています。どこの国が良いとか悪いと言うことではありません、しかしそれが度を越えて親族を優遇したような、行き過ぎた行為になってしまっただけでは良い結果になる事はありません。特定の人だけを優遇するような行為は必ずしも望まれません。



日本には昔から「武士道精神」として「日本人の誇り」が代々受け継がれています。悪いことをすればそれは必ず自分にまた返ってくる、誰かがそれを見ていると教えられたものです。こういった道徳観や文化を持った国に生まれてきた事を誇りに思います。

以前神戸、東北、熊本などで起きた震災の時も暴動や略奪が起きず、みんなが共に苦勞を乗り越えようと協力し合い節度ある行動をとりました。他の国には類を見ないこのような素晴らしい日本の文化、日本人の心を次の世代に伝えていかななくてはなりません。

そしてこのような精神は病院ではさらに重要になります。当院では7月1日から回復期病棟の運用を開始しました。8月からは31床で本格的に病棟が動き始めています。病院全体として153床をどう運用していくのか協力し考え

当院独自の回復期病棟を模索する必要があると思います。そしてなにより職員個々が患者様に必要な医療はどのようなものなのか意識して行動しなくてはなりません。これまでは病状が落ち着いていなくても発症から8週間以内に回復期病院に入院しなくてはならないという期限に追われていました。高齢になればなるほど二次障害、合併症が多く発生することを考えれば急性期病院の中にある回復期病床は患者様にも優しい医療の提供が実現できるのではないのでしょうか。救急に左右され

る入院と、病床数状態に左右される転院のベッドコントロールは非常に難しい事が当院の問題でした。これが解消できればさらに良い病院づくりが出来るのではないかと考えています。

ワーキング シンデレラ制度

2013年に制定されたワーキングシンデレラ制度、2016年4名の制度利用者が揃い初めて施行されました。

この制度は、アフリカの医療支援活動に従事してきた宮田久也氏によって考案された新しい形の制度です。「休めない制度だらけの社会に、休める有給制度を広げること」で利用者には「一生ものの出会い」を、企業には「人材不足解消方法」を同時に提供するというコンセプトに当院院長が共感し導入することになりました。

大西英之院長も1977年（40年前）に3カ月の長期休暇を使いヒマラヤ山脈カラコルムの最奥地、タフルタム峰の登頂に成功されています。

院長はこの登人生において、自分の頭で考え、自分の足で行動し、自分で責任を取ることがいかに大切であるかということを感じ知らされたと言われています。こういった一生ものの経験や出会いの重要性を知っているからこそ、このワーキングシンデレラ制度の導入に踏み切ったのだと思います。

そして昨年初めて制度が実施されました。紙面では表すことの出来ない経験であることは分かっているのですが、ワーキングシンデレラ制度によって得た経験が一体どんなものなのか少しでも知っていただく機会になればと思います。



ライフ・ワークバランスの重要性

脊椎脊髄外科センター 看護部 主任 亀井 智子

入職を考えていたときに当院のホームページにワーキングシンデレラ制度の事が書いてあり興味を持ちました。この制度が開始されると聞き「普通に働いていたら出来ない事」、「今やりたいと強く思っている事」をテーマに考え、普段行くことのできないような場所へ旅に出ることにしました。考えた末、一番行きたかったポルトガルだったのでヨーロッパに決定しました。しかし物価が高くテロも多発していたため長期滞在は困難かとも思いましたが、ドイツに住む友人を頼りに滞在させてもらえることになり、ドイツを拠点にヨーロッパへの旅を始める決意をしました。とは言うものの漠然と「3か月間ヨーロッパに行く」と決めただけ、結局は現地に行って翌日の予定を立てる慌ただしい毎日となってしまいました。

日本を经てドイツ・ケルンに到着後数日してポルトガルを目指しました。イタリアのミラノを経由してリスボンからコインブラと北上しポルトガルで約1週間滞在し

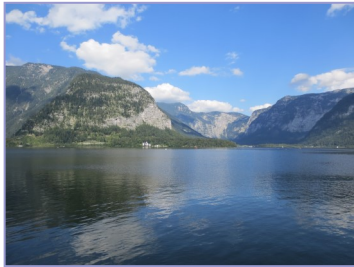


ました。ポルトガルはヨーロッパの国の中では物価は安いほうで食べる物も日本人が好みそうな料理が多かった印象です。また町並みはどこを切り取ってもかわいらしい外観で街歩きをととても楽しめました。

ケルンへ戻り次は2週間程度の一人旅を計画しました。全くの無計画でしたが電車やバスを駆使して、ドイツ・ケルン→スイス・ルツェルン→チューリッヒ→オーストリア・ザルツブルグ→ウィーン→ドイツ・ベルリン→ハンブルグ→ケルンと回りました。



シントラ (ポルトガル)



ハルシュタット (オーストリア)

スイスの大自然やオーストリア・ハルシュタットの景色は壮大で非常に美しいものでした。ハルシュタットは大きな湖と山々に囲まれた湖畔の町で、そこに住む人たちは自然と共存しているように思えました。しかし実際にここに住む人たちは田舎で不便さを感じることも多いとのことで、認識の違いに驚きました。ウィーンでは自然の美しさよりもハプスブルグ家の栄華を感じ取れるヨーロッパ独特の建物とその大きさに圧倒されました。

次にむかったベルリンではドイツの首都そして近代的な部分



もありながら第二次世界大戦での爪痕を残すベルリンの壁なども残っておりドイツ史を学ぶ事ができました。その後ハンブルグの街並みを楽しみケルンへ戻り、イギリス・ロンドンで2週間、現代イギリス文化の象徴と言えるミュージカルなどを鑑賞して過ごしました。

休暇取得前、計画も不十分だったため不安を抱えた出発で、旅先でも危険な場面に遭遇する事もありました。しかし色々な方の助けを借り、出会った方たちはみな良い人ばかりで何とか乗り切れたのだと思います。知らない土地で目にする文化や人に日々感動し刺激され、一泊同じ部屋で過ごしたり、ほんの数時間一緒にいただけなのに会話の中から生活スタイルや国民性を見て取ることが出来、旅のだいご味を感じました。2カ月弱の旅はとても充実しており、ときにはつらいと思うこともありましたがこれからの人生において非常に良い大きな経験です。



ルツェルン (スイス)



ボローマーケット (ロンドン)



ロンドンの街並み



ロンドン エリザベスタ (通称; Big Ben)

この休暇中私はワーク・ライフバランスについて考えさせられました。欧米人は *life > work* 日本人は逆になっている人が多いのではないのでしょうか。もちろん国民性や生活環境が異なるため仕方がないとも思います、人によってもその考え方は様々です、しかし十分な休息は心と体に大切であり、考える力にもつながります。忙しさのあまり十分考えることが出来ない状態で仕事をすることは見落としにもつながります。休暇を通して私は精神的休息が十分にできました。昨年10月に職場復帰しそれを感じ、新たな気持ちで仕事が再開できました。

最後に休暇をとるにあたり病棟スタッフをはじめ多くの方々の理解と協力があって3か月間の休暇を取得することが出来ました。テロも多発しており休暇中に心配して連絡を頂いたりもしました。ご迷惑をおかけしましたが、何よりも暖かく送り出して下さった北2階病棟のスタッフに心から感謝しています。本当にありがとうございました。



海を越えて - 私が過ごした3ヵ月 -

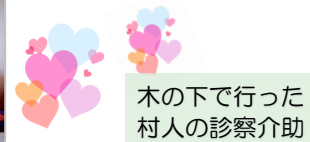
脳腫瘍・頭蓋底外科センター 看護師 助川 理子

この3ヵ月の休暇を利用して、まず国内で東北大震災復興支援を行ったのち、国外では主にケニア・タンザニア・タイ・ベトナムに滞在し、看護師として医療ボランティアを行いました。私にとって、これまでの人生の中でこんなにも濃い3ヵ月はありませんでした。この期間の中で、一番印象に残っているのがアフリカ滞在です。アフリカは私の人生を大きく変えてくれた特別な国で、渡航は今回が3回目となりました。現地の人たちとの懐かしい再会とたくさんの新しい出会いがあり、毎日が感動と刺激で溢れていました。

発展途上の中にあるケニアやタンザニアでは、医療の手が届かないため人々は痛みにただただ耐えて、早くに亡くなっていく現状があります。『貧困』に苦しみ、親の顔を知らない子、靴も履けない、学校にも通えない、そんな子供がたくさんいます。滞在中は、現地の病院で看護師として働いたり、現地医師と村へ巡回診療に行きました。目を背けたくなるような現実に直面し、過酷な環境の中で自分自身も体調を壊し、何もできない自分に不甲斐なさを感じ、何度も心が折れそうなきがありました。そんなとき、いつも立ち直らせてくれたのは、現地でひたむきに生きる子供たちの姿でした。



たった一人の日本人の私を快く受け入れてくれた患者さん



木の下で行った村人の診察介助

日本の病院がとても恵まれた環境にあるという事をいやというほど思い知らされた。



Page 4



患者さんの診察風景



ケニアの小学校 休み時間のコマ

文化や風習、宗教や言葉の壁を越え、一緒に働くことはもちろん決して簡単なことではありませんでしたが、そこから得られたすべての経験が今の私の財産となっています。この休暇期間で、何か変わったかと言われたらはっきりとは分かりませんが何より私は、これまでよりもずっと明るい未来を想像できるようになりました。世界のどこかに帰る場所、帰りたと思える場所があることって本当に幸せなことだと思います。

タンザニア



無医村の地域で行った巡回診療の様子

村の子供がたくさん集まってくれました

います。幼い頃からの夢であった、国際医療に携わる仕事がしたいという思いはさらに強まりました。いただいた機会、そこから得ることのできたたくさんの経験と夢を忘れずに、これからももっともっと世の中に返していけたらと思います。すべては、院長先生をはじめ、この制度実現に向けて関わって下さった皆様一人ひとりのおかげだと思っています。心から感謝の気持ちを込めて、3ヵ月間を本当にありがとうございました。



「将来看護師になりたい」と話してくれた10歳の女の子♡

シンデレラ休暇を通して

北3階 回復期病棟 看護師
瀬田 麻美子

2016年10月～12月の3ヵ月間シンデレラ休暇を利用し熊本県南阿蘇村、Nepal、Kenya、Ugandaを訪れました。目的は被災地をこの目で見て助け合い活動に参加する、Nepalの病院見学と医療現場の実際を知る、NGO団体を通して支援しているチャイルドと対面する、孤児院で子供たちと触れ合い現地の人々の中で生活をするのでした。南阿蘇村では主に農家の方の農業のお手伝いや土砂の片づけをさせて頂き、Nepalでは大西院長先生と古くからお知り合いである脳外科学会会長のBasant Pant先生の病院で研修をさせて頂きました。またKenyaやUgandaでは英語を教えたり、食事を作ったりと現地の子どもたちと同じ生活をおくりました。

ネパールでお世話になった病棟スタッフ



この3ヵ月たくさんの笑顔に出会い、人々を通してたくさんの貴重な経験と多くのことを学ばせて頂きました。中でもUgandaでお世話になった家には水道がなく、毎日40Lの水を川まで汲みに行った経験がとても印象に残っています。家から川まで歩いて15分位でしたが、川で出会った兄弟は汲んだ水を持ってこれから10キロ近く歩いて帰ると言って去っていきました。蛇口をひねれば飲める水が出る、命の危険を気にせず街を歩き生活を送ることが出来る、私たちの国ではごく自然で当たり前のことが世界では当たり前でない現状がありました。

出逢う人たちは皆私が考え、想像する以上の苦労や苦難を抱える人や子どもたちばかりで、その中で懸命に前を向き生きる姿は私が忘れていた大切なものを思い出させてくれた気がしました。出会った人たちに恩返しできることは何なのか、経験や学びを最大限に生かせる方法は何なのか私は未だに見つけれずにいます。ただ熊本の現状や、世界の現状を一人でも多くの人に伝えたい、知ってほしい、再びこの場所を訪れるときに今回の恩返しができたらと思っています。もっと英語が出来たら、たくさんの知識や技術があったらよりお役に立つことが出来たのではと思う日々です。



またこの3ヵ月を通して改めてシンデレラ制度の素晴らしさを実感することが出来ました。そして今回この制度を利用するにあたり周りの

ウガンダの子供たちとその日々



ウガンダの子供たちとその生活

ウガンダではお世話になりました



ケニアで支援したチャイルドと初対面

方々の協力なくしては実現できなかったことであり、Nepalを紹介して下さった大西院長先生を始め長いお休みを取るにも関わらず笑顔で送り出してくださった病棟スタッフの皆様、一人一人に改めて心から感謝しています。

最後に、アフリカの子どもたちの笑顔が一つでも増えますように・・・私はこれからも大好きなアフリカの子どもたちの力になっていきたいと思えます。

新入職員の方に聞きました ～入職後に思うこと～

今年も多くの新入職員を迎え2017年度がスタートしました。昨年はクリニックの新設、今年度は回復期病棟の開設とよりよい医療を目指した試みが次々と立案され現実化していています。これに見合う人材、ともに働く仲間として27名の新鋭が集まりました。ようやく慣れてきた頃だと思います、今の自分、これからなど見据えてどういう思いで働いておられるのか各部署から代表して聞いてみました。



必要とされる人材に

臨床放射線技師 糸谷 真人

2017年3月の診療放射線技師免許取得後、当院に採用して頂き早5カ月が経ちました。元々大学を卒業後ハイブリッドカーの走行用バッテリーの制御ソフト開発にSEとして従事していましたが、2011年の東日本大震災により発生した福島原発事故を通して放射線に対して自分が無知であることに恐怖を感じ、放射線は人体に対して大きな脅威である反面、現代の医療において必要不可欠のものである所に非常に興味がわきました。診療放射線技師は放射線に対する専門的な知識と技術を身に着けることができ、またより多

くの人々とかかわりを持つことができる非常にやりがいのある仕事であると感じたため、診療放射線技師になることを決意しました。

当院に入職してから新人教育をはじめ放射線科内外の先輩方からのアドバイスや早朝カンファレンス、勉強会なども含め様々な知識と技術を得ることができる環境にあり、その中で患者様それぞれの症状に合わせた正しい撮影を行うことができるよう日々努力しています。私自身、診療放射線技師としてまだまだ未熟であり指導を受けることが多々ありますが、一つ一つしっかりと受け止めより多くの知識と技術を身につけ、当院に必要とされる人材になれるよう精進していきたいと思えます。今後ともよろしく願いいたします。



脳神経外科病院で勤める薬剤師 薬剤師 長谷川 琴音

子どもの頃、近くの薬局に薬を買いに行ったとき、ものもらいだと思っていたのですが、薬剤師さんが虫刺されだと気づいてくれたので、正しい薬を選ぶことができました。自分の持っている知識を最大限に生かして私を助けてくれたことがとてもかっこよく見え、薬剤師の仕事に興味を持ちました。病院実習の際には、患者さんがドクターには気を遣って言えないことを薬剤師さんに相談している姿や、疑問や不安を感じている患者さんに対して、納得のいく返答をされている姿を見ました。どちらの患者さんも安心された様子で、私もこんな病院薬剤師になりたいと感じました。また祖父が脳梗塞の手術をしたときに、脳の疾患は他の機能にも大きく影響を与えるため、患者さんがより不安になりやすいものだという事を強く感じました。私も脳外科に勤務しこういった患者さんの不安を少しでも取り除く助けになりたいと思いました。



今は薬剤部で外来業務を行っています。少しずつ業務には慣れてきましたが、まだまだ学ぶことや新しい発見が多く、先輩方に助けていただきながら日々勉強中です。薬剤師にしかできない専門性を活かして患者さんによりよい医療を提供できるよう知識を深めていきたいです。他職種とも連携をとり、信頼関係を築くことで、患者さんにとって何が一番かを常に考えられる薬剤師を目指したいと思えます。





大西脳神経外科病院に入職して

南4階病棟 看護師 大津 美佳



私は看護師として内科病棟に4年間勤務していました。看護師としてのスキルアップを目指し、この度大西脳神経外科病院に入職させていただきました。

看護師経験が4年だけでもあるとはいえ、内科から脳神経外科という全く違う分野へ変わることはすごく不安でした。現在入職して6ヶ月が経過しましたが、日々学習することが多く、大変であ

ると同時に、自分の無知さを痛感する毎日です。病棟の先輩方が、お忙しい中でもすごく丁寧に指導してくださり、少しずつ自分でできることが増えてきました。スキルアップを目指し、脳神経専門であるこの大西脳神経外科病院へ入職したからには、脳神経外科の看護師としてプロフェッショナルになりたいと考えています。一日も早くチームの即戦力になれるよう積極性を大事にし、前向きに日々の業務・学習に取り組んでいきたいと思っています。よろしくお願い致します。

新たな気づき

南3階病棟 看護師 出口 英典



4月より当院で看護師として再スタートしました。今までは集中治療室で5年間働いていましたが脳神経外科に興味があり、転職を決意しました。転職当初は一般病棟で働くことや新たな環境への不安がありました。先輩方に優しく指導して頂き楽しく働くことが出来ています。入職し6カ月が経過し多くの学びと新たな視点を持つことが出来ました。

今までは急性期や周術期看護が主であったため、生命の危機を脱した患者様は一般病棟へ転棟します。そのため、患者様の「命」についての視点がほとんどでした。しかし今では、脳卒中急性期の看護に加え、患者様の生活や退院支援に向けた

看護を考える必要があります。それは、患者様の残存機能を把握し、自宅退院や転院といった次のステップにつなげていくための視点です。患者様やその家族が不安なく次のステップに移るためには医師とコメディカルが連携し入院前の生活状況や家族背景を把握し、必要があれば介護保険などのサービスに繋げることが必要です。これからも脳神経外科の知識を深めながら、患者様やその家族に寄り添い「生活」を考えた「退院支援」が行える看護師を目指していききたいと思います。



入職～回復期病棟オープン

北3階病棟 看護師 平井 淳



今年より新設された回復期病棟で勤務しています。入職してから開設されるまでの2カ月急性期だったためわからない事ばかりでしたが先輩方に優しく丁寧に指導して頂き安心して働くことが出来ました。回復期病棟は開設して間もないため、まだ手探り状態でどんな風に働くのだろうかと不安もあります。しかしより良い病棟にするにはどうしたらいいのかみんなと相談しながら1から始めると言う貴重な経験もさせて頂いています。先輩方

も優しい方ばかりで和気藹々とした雰囲気の中、毎日楽しく働くことが出来ています。当院の回復期は急性期病棟からの転入が多いため情報共有がしやすいことや入院から退院まで一貫した看護を提供できることが魅力だと考えています。患者さまが安心して在宅などへ退院できるよう先の生活を見据えてチームアプローチが出来るよう頑張っていきたいと思っています。

ルンバのように

北2階病棟 城戸 遥



4月から北2階病棟で勤務させて頂いている城戸と申します。看護師1年目の新人です。福岡、鹿児島での生活をjてこちらに来ました。関西に来るのは初めてです。慣れない環境に少し緊張していま

すが、病院スタッフ、患者様の温かいお言葉に元気をいただき、学びの多い充実した毎日を過ごしています。本当にありがたいと思います。

私の目標は、生命の危機に適切に対処し患者様やそのご家族の心に寄り添うことのできる看護師になる事です。突然の病気による不安、回復過程でのもどかしい気持ち、脳神経、脊椎・脊髄疾患に特有の病期に生じる様々な辛さがあると思います。そこに寄り添

い適切な技術で対処し、安全と安心を提供できる看護師になれるよう努力していきます。今は業務を覚えるがやっとで、周りの方に助けて頂きながらどうにかやっている現状です。先輩看護師の助言を無駄にしないよう日々を大切にしていきたいと思ひます。至らない事ばかりの私ですが、元気と明るさだけは負けません。4月に六甲の伊吹岩(447m)に上ってきたのですが、息が上がり、心臓はバクバクで景色を楽しむ余裕もなく体力のなさを痛感しました。カラオケやドライブが好きで運動は苦手ですが、病棟をルンバのように隅々まで黙々と回れる体力をつけていきたいので運動初心者の私に優しい運動メニューがあればぜひ教えてください。どうかよろしくお願ひいたします。



言語聴覚士として歩み始めて

言語聴覚士 田淵 志歩



4月から当院へ入職し、6か月が経過しました。学生の頃から、急性期は発症直後から患者様に関わるため、対応の仕方によっては良くも悪くもなり、迅速でかつ適切な判断が求められることに専門性の高さを感じていました。当院へ病院見学させて頂いた際、多くの先輩方に刺激を受け、言語・嚥下障害を含めた脳について学びたいという思いが強くなり、当院を希望させてもらったのを覚えています。

入職してから、日々変化する状態の把握や、リスク管理の大切さ、また人生の先輩方と関わる医療人としての姿勢などを学び、吸収の多い毎日です。患者様に対する自分の検査や治療の判断が適切であるのか、拒否や覚醒が低い患者様にどのような言葉掛けをすると反応されるのかを試行錯誤をし、臨床の難しさを痛感しています。その中で私は疑問に思ったことは職場の先輩方に相談し、親切丁寧に教えて頂いている環境に感謝し、これからも一人前の言語聴覚士となれるよう、日々頑張っていきたいと思ひます。食べられる喜び、話せる喜びを患者様と共有し、「あなたに会えてよかった」と言っただけのような言語聴覚士になれるよう、努力し励んでいきたいと思ひます。

編集後記

暑かった夏も過ぎ朝晩は涼しく過ごし易くなってきました。少し気の緩みそうなこんな季節ですが、体調管理に気を付け夏の疲れを癒せるようにしたいものです。今回ぶれいんのテーマは自分が今思っていることという感じで、新入職員の方とシンデレラ制度で

の体験談をまとめてみました。随分発効までに時間を要し、原稿によっては文章を若干手直ししなくてはならないこともありました。今後ともぶれいんの発行に関しては写真や原稿など皆さんのご協力が必要です。結構無理なお願いや短い期日での原稿依頼などありますがよろしくお願ひいたします。



(吉野)